

## 形容動詞と形容詞の語形の変遷について

望月, 郁子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

52

(終了ページ / End Page)

63

(発行年 / Year)

1965-10-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019136>

# 形容動詞と形容詞の語形の変遷について

望 月 郁 子

一

形容動詞と形容詞とは語根を同じくするものがある。例えば、ハルカ・ハルケシ、ノドカ・ノドケシなどである。この一聯の語群は、従来、専ら音韻論的な立場から追求され、a↓eの転化によって、ハルカが古く、それがハルケシに転じた<sup>注1</sup>とされている。しかし、ハルカ・ノドカという形容動詞語幹と、形容詞に接辞のついたウツクシゲ・ヨゲなどは、関係があらうなどとはいわれていない。また、ハルカ・ノドカなどのカはどんな意味か、といった問題も、まだ、究明されていないようである。私は、語根を同じくする形容詞と形容動詞の形態を調査した。その結果、①ハルケシ・ノドケシなど「ハケシ」型の形容詞は奈良時代に造語力を発揮したものであること、②ハルケシ・ノドケシなどという形容詞は、ハルカ・ノドカなど「ハカ」という形態と対応するもので、それと相違するウツクシ・ヨシなどという型の形容詞は、ウツクシゲ・ヨゲなど「シゲ」という形態と対応すること。そして、この「ハカ」型を持つ語は、「シゲ」型を持たないということがわかった。また、意味の面から見ると、「ハカ」

型のカと、「シゲ」型のゲとは、本来同一の語であるらしい。私はこれから、これらのことについて、やや詳しく述べてみたい。

順序として、まず①これらの型がどんな表われ方をするかを述べ、②次に「ハカ」「シゲ」の意味について述べ、③「ハカ」と「シゲ」が重複しないのは何故かを考えてみたい。

なお、便宜上、ここでは、ハルケシ・ノドケシの類を「ハケシ型」、ハルカ・ノドカを「ハカ型」、ウツクシ・ヨシを「ハシ型」、ウツクシゲ・ヨゲを「シゲ型」と呼ぶことにする。

## 二、諸型態の表われ方

### ①ハケシ型とハカ型

#### (イ) 上代における表われ方

上代のハケシ型は、十二種ある（アカラケミ・アキラケキ・カソケキ・サヤケシ・シヅケシ・スムヤケク・タシケク・タヒラケク・ハルケク・ヤスラケク・ユタケキ、及びアタタケク）。これに対応するハカ型は、上代には六種ある（アキラカニ・サヤカニ・シヅカニ・タシカニ・スミヤカニ・ユタカニ<sup>注2</sup>）。これが平安時代に下ると、

【表1】上代における「カ型」と「ケシ型」の対応

カ型	ケシ型				
	ケシ	ケキ	ケク	ケミ	ケサ
あからか(源) あたたか(か) かすか(古今) 左夜加爾(万)	明可仁(宣)[41]	安伎良氣伎(万) 温(古) 可蘇氣伎(万) 佐夜氣吉(万)	明久(万) 暖(万)	阿可良氣美(古) 清(万) 安美(万)	
たひらか(土) はるか(か) やすらか(か)	豊尔(祝)[伊4]	由多氣伎(万)	安良氣久(祝)[大殿] 寬久(万)		
	静加尔(宣)[9] 急尔(祝)[灘] 慥(万)	平伎(宣)[32]	左夜氣久(万) 静雲(万) 須牟也氣久(万) 多之氣久(万) 多比良氣久(万) 波流氣久(万)		
					遙之(万) 遙左(万)

①この表は、古事記・日本書紀(字音仮名表記のみ)・風土記(同上)・祝詞・続日本紀宣命・万葉集・続日本紀歌謠・仏足石歌に表われたケシ型の種類と、それに対応するカ型の種類を表示したものである。

②ケシ型のうち、上代に用例が見えないが平安時代になって表われるものは、これを平仮名で書いた。

③( )内は出典の略号。

古||古事記(古事記大成索引による)  
風||風土記(日本古典文学大系本による)  
祝||祝詞(同右)  
宣||続日本紀宣命(岩波文庫本による)  
万||万葉集(万葉集大成総索引による)

古今||古今集(西下経一・滝沢貞夫「古今集総索引」による)  
か||かげろふ日記(佐伯梅友・伊牟田経久「かげろふ日記総索引」による)  
源||源氏物語(源氏物語大成による)  
土||土左日記(山田孝雄「土左日記」宝文館による)



カとはならず、ツユケシ・ツユケゲ、ムクツケシ・ムクツケゲとなる。アツシ・アツゲ、ウツクシ・ウツクシゲ等の関係と同様である。

◎について——ケヤケシ・シホドケシ・ナマケヤケシ・フクツケシの四語は、それに対応するカ型・シゲ型の有無が未詳で、④のハルケシの類か、⑤のツユケシの類か決め手がない。そこで別項とした。<sup>注3</sup>

①について——Dに入れたのは、ヲシケシ一例であるが、これは、他の場合といささか相違する。普通、シケシ型は、それに対応するシゲ型やシ型が存在しないものである。サヤケシに対しサヤゲ・サヤシといった形はない。だから、ヲシケシが、同根のシゲ型であるヲシゲやシ型であるヲシと対応するのは、シケシ型として違例である。ヲシケシの用例は、源氏胡蝶に一例見える以外は未詳。

それで、⑥◎①を別にすると、源氏物語のシケシ型は七種で、すべて対応するカ型をもつ。これを上代と比較すると、シケシ型の種類は上代の十二種から七種に減り、一方、平安時代に新造されたものは、アハツケシ・ノドケシの二種にすぎない。他方、対応するカ型は、上代には六種しかなかったものが平安時代には十二種に増加する。一体に、形容詞の種類は、上代語には乏しく平安時代に増加するものである。<sup>注4</sup>シケシ型の表われ方は、こうした形容詞一般の趨勢とは逆になっている。従って、シケシ型は、上代に盛んに造語力を發揮した形容詞で、平安時代には衰えたものであると云えよう。

## ②シゲ型

次に、カ型のカと並んで、主として形容詞語幹に接続して形容

動詞を作るゲの表われ方について考えてみよう。

ゲの用例は、上代では、古事記に「タノモシゲナクニ三ウ五無恃心下」があるが、これは、タノムココロモナクテなど異訓があつて確かな例ではない。平安時代に入ると、土佐日記に二種（ココロヨゲ・ニクゲ）、古今集に四種（ウレシゲモナシ・タノモシゲナシ・ツラゲナシ・ナゲ）、竹取物語に六種（キタナゲ・ココロハヅカシゲ・タノモシゲナシ・タヘガタゲ・ナツカシゲ・ナメゲ）と、時代が下るにつれて種類が増加し、源氏物語では、シゲは二六三種となり、それを基本にした名詞形シゲサは十種見える。従って、ゲは、平安時代に造語力を振ったといえる。

ところで、この、シゲ型が、前述のシカ型・シケシ型とどんな関係にあるのかについては、従来、あまり知られていない。そこで、源氏物語のシゲ型とそれに対応する形容詞を抜き出し、シカ型・シケシ型との関係を見た。その実際の一部として、アの部を表示してみよう（表ⅢE）。イの部以下については、特に、例外と考えられるものを、Fにまとめておいた。

なお、ここでは、シカ特殊型を新たに一つの形態として立てた。シヅヤカ・ノドヤカなどシヤカの型の語は、シヅカ・ノドカなどのシカ型とは意味が異ると考えられる。それで、シカ型とは扱いを別にした。これには、シヤカの他に、荒ラカ・赤ラカなどのシラカ、アテハカ・浅ハカなどのシハカ、オロソカのシソカなどがある。

この表から、次のことが云える。

①シカ型を持つ場合には、シゲ型を持つことはない。（源氏物語に表われるシカ型の数は四六、シゲ型は二六三、シカ特殊型はシラカが一七、シヤカが三八、その他が一ある。その中で例外は三つ

【表Ⅲ】源氏物語における形容動詞と形容詞の関係

F		E			
メヅラカ		アハツカ	アザヤカ アタタカ(か)	アエカ アキラカ	カ型
		アハツケシ	暖(万)	阿可良気美(古) アキラケシ	ケシ型
メヅラシゲナシ ニホヒヤカゲサ	アリガタゲ アルマゲ ワタタシゲ	アハレゲ アヤシゲ アヤフゲ アラマホシゲ	アナヅリハシゲ アナヅリニクゲ	アサマシゲ アイギヤウナゲ アウナゲ	ゲ型
メヅラシ	アラシ アワタタシ	アラシ アリガタシ	アナヅリハシ アナヅリニクシ	アカシ アサマシ アサシ	シ型
		アララカ		アカラカ 浅爾(万)	ラカ型
ニホヒヤカ	アラヤカ		アテヤカ		カ特殊型
			アテハカ	アサハカ	ハカ型
	オロカ	鹿備(祝)〔道〕	アハレ	アテ	備考 同根かと思わ れるもの

- ① ( ) を附した例は源氏物語に見えないもの。( ) 内の出典は表Ⅰに同じ。  
 ② ～カ特殊型には、他に、～ソカ、～リカ、～ヨカがある。これらは、アの部に例があらわれないので、この表では、そのための欄をはぶいた。

だけである。<sup>注5</sup>

⑥しカ型に対応する形容詞はしケシ型である。しカ型はしシ型と対応しない。全用例中例外は一例（Fのメヅラカーメヅラシ）のみである。

⑦しゲ型に対応する形容詞はしシ型である。しゲ型はしケシ型と対応しない。（表II⑧⑨をも参照されたい。）

⑧しシ型としケシ型は重複しない。<sup>注6</sup>例外は表II⑩のヲシーヲシケシのみ。ヲシケシが違例。

以上を要約すれば、しカ型はしゲ型と重なっては存在しないということがある。それならば、何故、重複しないのだろうか。カとゲとは、意味上どんな関係にあるのか考えてみよう。

### 三、カとゲの意味

#### ①カの意味

手がかりとして、ノドニ・ノドカを例にとる。ノドは、能抒と、ノ・ド共に乙類、ナダラカのナダと同源である。<sup>注7</sup>

ノドニは、流水・浪・風など流動するものについて、流動の仕方が緩慢で起伏が少ないのをいう（万葉集二<sup>一九七</sup>「流るる水も能抒爾かあらまし」、同十三<sup>三三三九</sup>「立つ浪も能踊丹はたたず」、同十三<sup>三三三五</sup>「吹く風も和には吹かず」）。

ノドカは、ノドである様子・雰囲気・気分・感じの意で、天候については、日の照り方や雨の降り方が、荒立つけはいもなく同じ状態で続く様子をいい、人事に関しては、変事のない世の中の平穏な様子とか、急用や心労のないのびのびした気分とか、感情に起伏の少ない性格、ゆったりとした感じなどをいう（源氏常夏「風はいとよく

吹けども日のどかに〔陰ル気配モナク照リ続ケル様子デ〕曇りなき空の」、同宿木「今日の時雨常よりことにのどかなるを」、同薄雲「世の中騒しくて、公様に物のさとし繁くのどか〔平穏ナ様子〕ならで」、同薄雲「のどかなる〔ノンビリシタ気分ノ〕御いとまのひま」、同総角「のどかにおぼせ。心いられてな恨み聞え給ひそ」、同薄雲「御心さまのおいらかに子めきて：有難きまで後安くのどかにものし給へば」。

ノドカは、見た目の感じや様子をいうこともあれば、目には見えない人の心のうち、気分をいう場合もある。他のしカ型では、例えば、サヤカは、はっきりと目に見える様子・見た目をいう用例が圧倒的に多い。一方、シヅカには「心地ぞなほしづかなる〔落着イタ雰囲気ダナト思エル〕け、〔見タ目ノ感シ〕を添へばやとふと見ゆる（源氏空蟬）」と、ケを添えて見た目を強調するかととれるものもある。こうした意味の片寄りには、カの上にくる部分ノド・サヤ・シヅのの意味の質に起因するもので、カ自体の問題ではあるまい。

カは、様子・雰囲気・気分・感じなどと訳せる語で、在るとわかるが手に掴めないものを原義とするのではあるまいか。

#### ②ゲの意味

ラウタシ・ラウタゲの比較を手がかりにゲの意味の抽出を試みる。源氏物語の紫上を対象とするラウタシ・ラウタゲについて、その表われ方をみると、ラウタシは、対象である紫上に対して光源氏が直接働きかけ得る時にあらわれ、ラウタゲは、紫上と源氏との間に物理的な距離がある時とか、源氏が紫上に対して手の施しようのない場合など、直接働きかけ得ない時にあらわれるという相違がある。

(美)「御硯あけて見給へど物もなければ、若の御有様やとらうたく見奉り給ひて、日一日入りゐて慰め聞え給へど、解け難き御気色いとどらうたげなり」。

ラウタシは、はかないもの、弱々しいものを対象として、可愛らしくて手をさしのべてやりたい、頼りになってやりたいと思う気持ちをいう。

ラウタゲは、対象との間に何らかの意味で距離があり、直接働きかけ得ないながらも、ラウタシとくけとめる時の言葉である。ラウタイ様子・感じ・気配・雰囲気・気分などの意である。見た目をいう例がかなり多いが、けはひ・声など、見えないものをもいう(若菜上「涙ぐみ給へるまみのいとらうたげ〔見ルカラニ可憐デ何トカシテヤリタイ感じ〕に見ゆるに」、東屋「浮舟ハ」かたちも心ざまもえ憎むまじうらうたげなり」、乙女「中障子ヲ隔テテ雲井雁が」ひとりごち給ふけはひ若うらうたげなり」。

ゲは、様子・感じ・けはひ・雰囲気・気分をいうと見当がつく。こうしたゲの意味は、ゲが形容詞以外の語に接続する場合、よりはっきりと抽出される。例えば、ヒトゲは、人がいるらしい感じ、女房など側仕えの人のけはひ、一人前の人間らしい雰囲気・気分などをいう(源氏蓬生「人の音するかたやと見るにいささかのひとげもせず」、同書末「中将の君はいづくにぞ、人げ〔女房ノケハイ〕遠き心地してもの恐ろし」、同総角「云ひ知らずかしづくものの姫君も、少し世の常の人げ〔男ノ雰囲気〕近く、親せうとなど云ひつつ人のたたずまひを見馴れ給へるは」、同濤標「京極のわたりなれば人げ〔物ノ数ニ入ル人間ラシイ雰囲気〕遠く、山寺の人相の声々に添へて」。また、ヒトゲナシ・モノゲナシ・アリゲ・マホシゲなどでは、ゲは、

様子・見た目の感じの意が全面的におし出されてくる(源氏宿木宮のうちの人の見思はん事も人げなき〔他目ニ一人前ノ人間ラシクモ見エナイ〕ことと思し乱るる事も添ひて)、同桐壺「息も絶えつつ、聞えまほしげなる〔申シ上ゲタソウナ様子ニ見エル〕ことはありげなれど〔アリソウニ見エルケレド〕、いと苦しげにたゆげなれば」——ちなみに、アリガホナリ・ココチヨガホナリなどのガホは、自分に向けられている側の目を意識している場合に使われ、見たところ：と云いたそうな様子<sup>注。</sup>の意である点、見た目をいうゲと相違する。

以上のように、ゲは、それが接続する語により、多少意味の片寄りを示すものの、ゲ自体としては、様子・見た目の感じ・けはひ・雰囲気・気分をいい、あるとわかるが手に掴めないものの意が中心にある。

これは、①で述べたしカ型のカと同じ意味である。

カとゲは、意味の上からは同じ言葉であり、且つ、語構成上カを含む型は、ゲを含む型と重複しない——これは、カとゲが同源の言葉であるからではないか。カとゲの間にka↓kē↓gēという変化があったのではないか。しかし、そう云い得るためには、しカ型としゲ型の重複する違例三つの説明が要る。また、ゲの古形と認めうるケがケ乙類であるという証明が要る。

### ③カ・ゲ重複の違例の考察

違例としては次の三つがある——①アタタカーアタタカゲ、②ニホヒヤカーニホヒヤカゲサ、③メヅラカーメヅラシゲナシ・メヅラシゲアリ。

一口に違例とはいえ、この三つは重複の仕方が一様ではない。①

②は「しカ」に対して「しカゲ」がある。①は「しカ」に対して「しカゲ」がある。語構成的に①②と③は異っている。

①アタタカゲについて——「暖かなるほどは、かく、し歩いて(宇津保俊蔭)」、「暖かにもあらず寒くもあらずぬ風(かげろふ日記下)」など、アタタカは、皮膚が受けとめる感じで、目には見えないものという。見た目にアタタカと見えるものを、源氏物語はアタタカゲと<sup>9</sup>いっている(末摘花「松の雪のみあたたか<sup>9</sup>に降りつめる」)。シヅカナルケの類であろうか。

②ニホヒヤカゲサについて——「まづこの姫君の御様のにほひやかげさを思し出でられて(源氏胡蝶)」。ニホヒヤカは、①のアタタカとはちがって、目に見える感じをいう。問題は、ニホヒヤカを名詞化する方法であろう。

しゲを名詞化したしゲサという形は、かげろふ日記にイミジゲサが、落窪物語にアシゲサ・ナメゲサが、枕草子にココロヨゲサがある。<sup>9</sup>これらは、形容詞語幹にゲが接続したイミジゲ・アシゲ・ナメゲ・ココロヨゲを、サを付けて名詞化したものである。源氏物語では、しゲサは十種ある。そのうち、当のニホヒヤカゲサを除いた九つは、イミジゲサなどと同様、形容詞語幹にゲが接続した場合に表われる(ナメゲサ・ノコリスクナゲサ・ラウタゲサ・ウツクシゲサ・カナシゲサ・クルシゲサ・スサマシゲサ・ハヅカシゲサ・ラカシゲサ)。一方、ニホヒヤカのようなしカ特殊型は、ハナヤカーハナヤカサ、マメヤカーマメヤカサというふう<sup>9</sup>に名詞をつくる。

ニホヒヤカゲサは、イミジゲサなどにひかれて生じた形であろうか。不安定な語型であったらしく本文異同が多い(ニホヒヤカサ河内本・ニホヒヤケサ横山本・池田本—サヤカの名詞サヤケサにひかれたも

のか)。他例未詳。

③メヅラシ、メヅラカ、メヅラシゲナシ・メヅラシゲアリについて——この語に限って、しシ型の形容詞がしゲ型と対応しないで、しカ型と対応し、更にしゲ型をももつ。二重の違例である。

まず、メヅラシ・メヅラカの対応上の違例をどう考えるべきであろうか。上代のしカ型の確例は、表Iに示したしケシ型と対応するものを除くと、十四ある(於保呂可爾(万)・於呂可爾(万)・佐太加(宣)〔5〕・多鷄蘇香仁(万)・都婆良可爾(万)・爾古余爾(万)・爾波可(万)・波都賀爾(風)・花八香爾(万)・竊仁(宣)〔31〕・麻佐夜可爾(万)・牟俱佐加(宣)〔5〕・米豆良可(宣)〔7〕・湯鞍于(万)——)内の出典は表Iのそれと同じ。この中で対応する形容詞をもつものは、米豆良可<sup>亦</sup>—米豆良之伎(万)だけである。一方、しゲ型の表われ方は、先に述べたように、奈良時代にはまだ発達していなかったらしく、ココロヨゲ・ニクゲなどという形は平安時代の資料にあらわれてくる。奈良時代に、しケシ型でない形容詞が、それに対応するいわゆる形容動詞を必要とする場合、しカ型としケシ型の対応になら<sup>9</sup>って、米豆良可—米豆良之伎(伎)が固定したのではなからうか。

次に、カとゲの重複については、メヅラシゲは、メヅラシゲナシ・メヅラシゲアリという形でだけ表われて、メヅラシゲ単独の用例は未詳というところに特色がある。一方、語構成機能の面からカとゲを見ると、ゲは、ナリ・サ(ナメゲサ等)・ナシ(ヒトゲナシ等)・アリ(ユカシゲアリ等)・ダツ(キヨゲダツ)・ノ(ナゲノアハレ等)などを下に伴い新たに複合語を構成するが、カは、ナリ・サ(ハナヤカサ等)と複合する以外は、複合語構成力が弱い。メヅラカーメヅラシゲナシ・メヅラシゲアリに於けるカとゲの重なりは、ナシ・アリ

に接続するための接続上の問題であろう。

ここで再びカとゲにもどる。ゲは、甲類乙類が不明であり、また清濁については、本来濁音ゲであった確証はないようである。奈良時代に清音で平安時代に入ってから濁音化した語彙には、例えばホドがある(万葉集では保刀とト清音)。ゲを清音ケと仮定することもできよう。メヅラシゲナシ・ヤスゲナシ・ユカシゲナシなどの「ゲナシは、オホケナシ・カタジケナシ・シドケナシなどの「ケナシ」と同一ではなからうか。「ケナシのケは、続日本紀宣命54に「賀多自気奈志」とケ乙類の例がある。これは、ゲの古形がケ乙類であるという証拠になるのではないか。そして、ハルカ・ノドカなどのカが、a↓ëの転化によりケ乙類に転じたものではないだろうか。

もし、そうであるならば、「カ型のカと「ゲ型」のゲの間には、ka↓kë↓gëという変化があったと推測することができるであろう。ハルカ・ノドカなどの「カ型」と、ウツクシゲ・ヨゲなどの「ゲ型」が重複しないのは、カとゲが本来同一の言葉であったからではあるまいかと、私は考える。

最後に、ゲを総括すると、ゲは「古くは清音ケ乙類で、ハルカ・ノドカのカの転。塩気・火ノ氣ヒノキのケとも同源か。あるとわかるが手につかめないものをいうのが原義。様子・感じ・けはい・雰囲氣・気分をいう。カと同義ではあるが、見た目をいう傾向がカよりも強い」ということになる。

#### 四 補記 「カ特殊型」について

先に、「ゲ型」の表われ方について述べた折、私は、「カ特殊型を

一つの形態としてたてた。しかし、それが、①「カ型」・「ゲ型」とどんな関係にあるか、また、どんな形容詞と対応するかとか、②「ラカ・ヤカ」などがどんな意味かといった問題にはふれなかった。ここで、これらについて考えてみたい。

##### ①「カ特殊型」と、「カ型」・「ゲ型」及び形容詞との関係

「カ特殊型」は、「カ型」と対応する(カゴヤカーカゴカ、コマヤカーコマカなど)。また、「ゲ型」とも対応する(カロラカーカロゲ、ハシタナヤカーハシタナゲなど)。

「カ特殊型」は、形容詞「ケシ型」と対応する(シツヤカーシツケシ、ノドヤカーノドケシ)。また、形容詞「シ型」とも対応する(アカラカーアカシ、アサハカーアサシなど)。

ところで、「カ型」・「ケシ型」・「ゲ型」・「シ型」の間には、次のような関係があった。(a)「カ型」は形容詞「ケシ型」と対応する。(b)「ゲ型」は形容詞「シ型」と対応する。そして、(a)のグループの語彙を④、(b)のグループの語彙を⑤とすると、④と⑤とは重なって存在しなかった。(前述二の②を参照されたい。)

しかし、「カ特殊型」は、④のグループとも⑤のグループとも対応する。このことの意味をどう考えるべきであろうか。

大体、「ラカ」・「ヤカ」に対して、「ラゲ」・「ヤゲ」という形態は存在しない。「カ型」には「カ特殊型」があっても、「ゲ型」には「ゲ特殊型」がないのである。

先に私は、「カ型」のカと、「ゲ型」のゲとは本来同一の言葉であろうと推測した。カとゲが同じ言葉ならば、「ラカ」・「ヤカ」などの「カ特殊型」があれば、「ラゲ」・「ヤゲ」がなくともこと足りたのではな



いか。だから、しゲ特殊型は生れなかったのではないか。しカ特殊型が、グループ(A)とも、また、グループ(B)とも対応するのは、以上の理由によるものと、私は思う。

② しカ特殊型—しラカ・しヤカ・しハカ—の意味

しカ特殊型としカ型・しゲ型との意味の差異は、しカ特殊型のカの上の部分、即ち、ラカのラ、ヤカ・ヨカのヤ・ヨ、ハカのハなどの意味にかかわるところが大きい。しカ特殊型のうち、しラカ、しヤカ・しヨカ、しハカについて簡単に述べておこう。

しラカ、しヤカ(ヨカ)—ラカは、目に見えていたり、聞えたりして、ここに在ると、はっきり認められるものについて、確かに：のところがある、確かに：のように見えるの意。ラは、何か確在性を意味する言葉で、ラム・ラシのラに通じるかもしれない。これに対し、ヤカは、心地など、目に見えないものとか、過去の事・離れている人・よく知らない物など、不確実なものについて、いかにも：の感じがする、という推量を意味する。転じて、まるで：のようだ、というたとえの意にもなった。平安時代に造語力を發揮した。ヤは、助動詞ユ(下二)と同源かと推測する。(宇治拾遺物語三「たけひきらかなる衆の：いたく制するがありけるを、成村はみつめてけり。：もとの朱雀門に帰りぬ。そこにいふ、『たけひきやかにて、：通さじとたちふたがる男、にくきやつ也』」)

ヨカ(ニコヨカ・ナヨヨカ・フクヨカなどのヨカ)は、万葉集に、爾古余可とあり、ヨ乙類である。ヨは、ヤカのヤが母音交替したものであろう。<sup>注10</sup>

しハカ—アサハカ・アテハカのハカ。ハは端であらう。

源氏物語でアテハカと云われる人物は、空蟬の弟小君・夕顔・明石在住時代の明石上・上京当初の玉鬘・北山の女房・小野妹尼・明石入道といった面々で、アテといわれる春宮・女一宮・紫上などをアテハカとは云わない。アテハカは、アテの中の端の感じが原義であらう。

【注】

1 橋本進吉博士著作集Ⅲ一七七頁。村山七郎「古代日本語の二三の音韻現象について」国語学第十七輯。森山隆「上代における連母音[ai]の転化について」国語学28など。

2 急ル・豊ルは、古事記・名義抄などに異訓もあるが、前後関係より、ここではスミヤカニ・ユタカニをとる。

3 ケヤケシ・ナマケヤケシは、異シ及びケヤカニと同源で、語構成上、

ケヤカ—ケヤケシ—ケシ

(類例)アカラカ—アカラケシ—アカシ

という関係にあり、しケシ型としてAに入れるべきかもしれない。

ケヤカの用例は雄略紀に「貴ケヤカニ」がある。しかし、確かな例は未詳であるので速断を控えた。

4 例えば、万葉集と源氏物語の総語彙数の対比は、形容詞では二七六対一一三〇、形容動詞では七五対六八三である。大野晋「基本語彙に関する二三の研究」国語学24。

5 例外はアタタカ—アタタカゲ(E)、ニホヒヤカ—ニホヒヤカゲサ(F)、メヅラカ—メヅラシゲアリ・メヅラシゲナシ(F)の三つ。

6 アカシと阿可良気美が併存する(表ⅢE)が、阿可良気美は、

しカ特殊型であるアカラカに対するしケシ型である（補記で述べるように、しカ特殊型は、しケシ型とも、しシ型とも対応する）。アカシに対してアカカとかアカケシという型は見られない。アカシ・阿可良気美の共存は、しシ型としケシ型が重複しないことの例外にはならない。

7 a—öの交替については、大野晋「日本語と朝鮮語との語彙の比較についての小見」国語と国文学S27年5月号、村山七郎「古代日本語の二、三の音韻現象について」国語学第十七輯などを参照した。

8 ヒトゲナシ・モノゲナシの差異について——人間をヒトとも

モノともいうが、ヒトは、その人格を認めた場合のいい方であり、モノは、人格を認めない場合のいい方である。モノゲナシは、得体の知れない存在としか見えないの意であろう。

9 落室物語・枕草子のしゲサについては、山田孝雄「平安朝文法史」四八一頁を参照。

10 注7に同じ。

（この原稿を書くにあたって、大野晋先生に御指導をいただいた。感謝申し上げます。）

（三五年三月修士課程修了・静岡星美学園教諭）